洛友會報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

そのおりおりのこと

大正6年卒
京大名誉教授　松田長三郎

（一）

一本松珠璣博士（大正一四年卒）から、近著「東海原子力発電所物語」の恵贈を受けた。わが国原子力発電の実際的な開祖ともいうべき同博士が、何も彼もが、未知であった原子力発電に取り組まれて以来、東海原子力発電所を完成し、わが国の原子力発電の体制を確立されるに至るまで、具さに経験された事柄を、詳細に叙述されたもので、同君にして初めて可能な、わが国の原子力発電の黎明期における貴重な記録である。すべてどの方面でも、先駆者、開拓者の道は嶮しい。前人未踏の茨の道を切り開き、新しい道をつけねばならぬから、予期せぬ種々の衝害を乗り越えねばならぬ。今は、過去を振り返って、淡々として述べておられるが、事業進展の道程において遭遇された数々の艱難辛苦の跡も、今では寧ろ、懐かしい思い出として同君の脳裏を去来するであろうとお察しする。東海原子力発電所は、必ずしも、万事、順調に進んだ訳ではない。事の大小はあれ、新らしいものに取り組む場合、種々の疑心、不安が、次から次に起ってくることは当然である。その判定・決断・決行には余程の信念と勇気が必要である。同君も云っておられるように、この書は、失敗の告白であると述べておられるが、およそ、失敗の経験は、なるべく秘しておかれることが多いが、失敗の経験こそ、むしろ成功の経験よりも貴重であり、後続者にとって、得難き参考資料となる。こういうことを、卒直に記載されることは、それだけ自信を持たれ、万全を期しておられた証左と信ずる。今後、原子力発電が、発電の主流となるであろう現在、巨大な金字塔として、不朽の功績を打ち立てられたことは、ありがたい又感謝に堪えないことで深き感謝と敬意を捧げる。願くは一層、自重加餐せられて、斯界の大御所として、指導に当られむことを切望する次第です。この拙稿を渡す間際に、小宮義和君（大正一五年卒）から、「榴隠独語」の恵贈を受けた。同氏は、なかなかの名文家で、従来「なにわの芦」「欧米管見」「俗暦略弁」「むさし鐙」「歌集」「関関集」などの著述がある。激務の傍ら、寸暇を得ての周到な考証を経ての著作であるだけに、じっくりと、一字一句を嚙みしめて、味わわせて頂くつもりである。多謝。

（二）

最も古い卒業生多田耕象さん（明治三七年卒）が先月亡くなられた。京大御在学中の回想記を、本紙五二号に寄せられたのは、つい先き頃であったが、電気事業界の最先輩として、誠に惜しい人であった。随分以前のことであるが、何かのことで、お尋ねしたいとのことで、東上の際銀座で、お目にかかったことがある。

更に乙葉真一君（大正七年卒）の逝去は誠に残念である。誠実な義理堅い人柄は、級友の信望を集め、殊に洛友会創立に際する大きな功労者であった。（別項参照）

会員ではないが中馬大阪市長の逝去も惜しまれる。往年、関西電力の黒四発電所完成の際、招かれた特別列車に、同車したことがあったが、市長就任後、間もない時であったが、いろいろの話の間に、栗本順三さん（昭和二年卒）とは、一緒に助役を勤めておって、今度の選挙にも、大変お世話になったと感謝しておられた。誠実な人柄は、名市長として人望が厚かったが、近代都市の公害問題、交通、土地、産業開発等に対して、愈々英知と勇気を必要とするとき斯かる人を失ったことは、大変惜しいことである。

黒四と云えば、あれは、いつのことであったか、東上の車中で、太田垣関電社長と平井副社長（大正一五年卒）にお目にかかった。これから黒四へ行く。一度見に来て下さいとのことであったが、関西電力の社運を賭して決行され、あの世紀の大事業を成功されるまでには、並々ならぬ御苦心がおありであったことと、今は亡き太田垣さんを偲ぶものである。昨一四日は、津軽海峡の海底トンネル（五四km）の起工式が行われた。これが開通し、新幹線鉄道が運行するようになれば、東京・札幌間を5時間余で結ぶことになるという。京都から東京へ行く場合、空港までに行く両ターミナルの時間が約2時間かかるから、たとえ飛行時間は50分にしても、所要時間は新幹線とあまり変らない。北海道と本州との快速な連絡を想うにつけても、敗戦時の流言蜚語を悪夢のように、想起する

（三）

十一月六日、講習所卒業生の集会に招かれた。九州・四国・関東方面からも参集された会員は90名許り、盛会であった。立石享三君の挨拶で初められたが、50年振りに再会する人もあって、愛惜尽きぬものがあった。村井貞三、白坂勇城両君等の病気欠席は残念であった。中本君は、当時の会報の合本を持って来られた。集中、幾編かの拙文があり、懐旧の情に堪えず、拝借して帰った。大体、書いたものは書きっ放しで、保存していなかったが、これからはこういうものはつとめて、纏めておくように心がけたいと思っている。

（四）

十一月八日、大正6・7年の卒業の信友会で、母校教室を見せてもらった。集まる者10名。大谷教授から、教室や大学の近況を承わり、古い名簿や記録を見せて貰った後、教室を経て、京大の誇る大型計算機センターを見せて貰ったが、その性能に驚くとともに、その借り賃が、年額三億五千万円（一日百万円）であることにも驚いた。その後、清風荘で、プラズマ物理およびその応用などについ

て、阿部名誉教授、光野阪大名誉教授など、最新知識の交換を行ない、電気研究会としての責を果した。（清風荘の使用は学術の研究のため、且つ総長の許可がいる）秋色漸やく濃やかな、西園寺公遺愛の名園を、心行くばかり観賞した。（46・11・15・記）

洛友会の大先輩、多田耕象氏（明治三十七年卒）と、乙葉真一氏（大正七年卒）が、相次いで此の秋に御逝去になりました。ここに、両先輩の追悼号として、御関係の深かった各氏に御執筆を御願いしました。

多田耕象大先輩の御逝去を悼む

大正十五年卒
前東京支部長　山本三郎

故多田耕象氏

洛友会最年長者の多田さんが十月九日おなくなりになった。まことに惜しんでも余りありです。山本、松尾両名は、十月十五日に御霊前に榊を奉って御冥福を祈って来た。当日は市川正義氏御夫妻（夫人は多田さんの長女）にも御目にかかることが出来て、おなくなりになった当日の様子を承ることが出来た。御話によれば多田さんは御高齢にもかかわらず、ずっと御元気で、ことに夏は庭へ出られたりしてお過ごしになり其の日も朝は、家族の方々とお話をしたり日頃と変りなくいられたが市川夫人がお庭の方からふと座敷を見られると多田さんが伏っていられるのに驚き救急車を呼ばれたが其れが来た時にはもう間に合わず寝むるが如くおなくなりになったとのことだ。享年九十二才まことに功成り名遂げて天寿を全うせられての大往生であったと思う。しかし私等は、大先輩いつまでも、御元気でと願っていたのに、まことに悲しく寂しいことだ。私と多田先輩との交りをふりかえって見ると最初は、学生時代で多分大正十四年のことだと思われるが、御存じの懇話会で多田さんの水力発電に関する講話があった時のことで当日遠くの席からお見かけしたのが初めてだ。

当時多田さんは東大で水力発電の講義をしておられると承知していたが当日はミスの多いプリントを用いて水力発電計画の大筋を熱心に講ぜられた。丁度私は卒業後、水力発電を志望していたので此の講義を非常な興味をもって聞いた。同級生も皆強い印象を受けたようで、約五十年後の今に至るまで話が多田さんのことになると当日出た式の "Chezy-Kuttter-Formula" の話が出る始末である。卒業後私は水力電気会社に就職し長野、新潟、福島と地方勤務を続けていたが戦後、東京へ出て来た。以後洛友会には時々出席するようになったが、丁度同級の石川辰雄君が東京支部長を任期の二ケ年つとめたので次期支部長の件で相談があった。其の時本部の故山村幹事の意見で他支部長の卒業年次のバランス上、私に引き受けろとのお話があったが会の運営の経験がなく従って自信もないので辞退したが支部運営のベテラン松尾三郎君を副支部長にするから協力してやれとのことで終に引き受けた次第である。幹事には池上文雄、河野義徳両君になってもらった。さて此の新支部の新企画として明治卒業の大先輩に今の内に学生時代の教室の様子やら懐旧談をまとめてもらい、其れを録音する。此れを次々諸先輩にお願いして録音テープのライブラリーにもっていくという計画である。此れは将来洛友会に取って貴重なものになるのではないか、との考えで早速実行にうつすことにした。

先づ手初に卒業年次の最も古い（明治三十七年）多田大先輩から御願いすることにして山本、松尾両名で世田谷のお宅へ伺い録音の主旨を申上げて御承諾を願うことにした。私は御目にかかるのは懇話会以来四〇年ぶりのことで又親しく口をきくのは勿論初めてのことである。多田さんは学者として又研究者及び役員として多方面に活躍され、かがやかしい業績の持主である。又自分の信念は頑として曲げられない偉大な人であり、電力中央研究所時代には電力界の鬼といわれた松永理事長に直言出来るのは多田さん一人のみとの事等を聞いていたので自然に私は多田さんを謹厳なこわい人であるという「イメージ」を持っていたわけであるが、応接間に通されて多田さんにお会いしたとたんにあたたかい気分につつまれて何でも遠慮なく御話し出来る雰囲気になったのはうれしかった。録音は心よく御承知下さって洛友会のことや色々と昔の思い出を御聞かせ下さって我々はすぐに旧知の間柄の様な気になってしまった。此のことは勿論多田さんのお人柄にもよるが私は同窓とか、先輩後輩とかが醸す或る大切な尊いものがある事を感じとれて有難い事だと思った。多田さんは録音にそなえて原稿を準備し初められたようだ。或る時は「一体誰がこんな事を考え出したのか」とのお尋ねがあり松尾君は「山本が考え出したのです」と答えると「仲々面倒なことを引き受けたものだなあ」との苦情が出たのであるが、あとで市川夫人から「あんなことを云っていますが結構楽しんで毎日原稿に取り組んでいるのですよ」とおもらし願えたので安心した様なこともあった。録音は昭和四十年十月十三日に山本、松尾、河野がお宅へ伺い河野君が録音をした。此の間の事情と録音の内様の大約は洛友会々報第五十二号に記載せられている。多田さんも録音が終ってやれやれと思われたのか、取って置きの「ブラック、アンドホワイト」一本をお出しになり「私はのみませんから」と云って下さっ

た。有難く頂戴して次の幹事会の時に皆でいただいた。其後まもなく「うなぎを奢ってあげる其の人選は私にまかせるから支部の四名の外大勢来て下さい」とのことで我々四名の他前支部長石川君と次期支部長久野君を誘って御馳走になった。木挽町の竹葉本店が昔からの御員でそこの座敷でいただいた。多田さんは御元気でおそくまで色々な御話をして下さって我々にとってはほんとに忘れることの出来ない楽しい夕を送ることが出来た。

又多田さんは唯一人の級友である神戸市に御住まいの中川恵郎氏とは常に手紙のやりとりはしておられたようだが「誰が中川君に会って其の様子を知らせてほしい」との依頼があり両氏は洛友会の最長老であることでもあり本部幹事に此のことをたのんだが急がしいのか仲々返事がもらえなかったが今年の夏私の級友歌原誠一君が中川さんをお尋ねして其の様子をくわしく多田さんに報告してくれたので私としては多年気にかかっていた御約束をはたすことが出来て歌原君に感謝している次第である

以上我々は短期間のおつきあいではあったが先輩と云うものの有難さをつくづく知ることを得た。今此の無私無欲の偉大な大先輩を失ない心のどこかに穴があいたような気がして大変寂しく又悲しいことだ。

多田さんの霊は冥土から洛友会の発展をみつめていて下さる事だろう。

心より御冥福を祈り申上げる。

大先輩であり、上司であられた多田耕象さんを偲んで

京都大学工学部教授
昭和十八年卒　上之園親佐

私が多田大先輩に初めてお会いしたのは昭和廿七年九月、多田さんが財団法人電力中央研究所常務理事、技術研究所長となられた就任挨拶の時である。

当時は研究所の創世期であった。すなわち、昭和廿六年に実施された電力再編成で、日本発送電株式会社、電力技術研究所が財団法人として発足して間もない時で、多田さんは所長就任以来研究所の育成に日夜身体を張って努力されておられた。その時に建てられた建物は今日においても使用されている高電圧実験棟、技術第一研究所本館などである。昭和卅三年三月、多田さんは常務理事、技術研究所長を退任され、その後は電力中央研究所顧問として、研究所の運営に参画されておられたが、本年十月九日、九十才の御高令でご逝去されました。

ここに慎んで御冥福をお祈り申し上げると共に、一文を寄せて、大先輩の御威徳を偲びたいと存じます。

多田さんは小柄で、清廉潔白、人情に厚い方で、気魄が五尺の身体に満満(みちみち)ておられた。所長に就任された時は七十一才の御年令と思いますが、烈烈たる気魄をもって事に処せられた。今にして思えば、本年六月故人となられた理事長松永翁は電力の鬼といわれた方であっただけに多田さんとの会談は気概に満ちたものであったろうと想像されます。いまは、あの世で、九十六才の翁と九十才の翁とが今日の電力界のことどもを語り合っていることでしょう。

多田さんは、電車で通勤されることが多く大きな鞄を下げて、お元気な姿で歩いておられた。道々所員の方々にも話しかけられ、所長室にあってはよく所員をお呼びになって、研究の進捗状況などを聞かれ、自らも理解を深めるように努力すると共に、所員の研究意欲の高揚には十二分にも配慮されておられ、所員からは尊敬されていた方でした。

多田さんは煙草は吸われたが、酒の方は下戸で、口にされず、今度産れてくるときは、酒呑みになりたいとよく申しておられた。酒を嗜まれないためか、私共若い者には、御馳走したり、酒の席では酒をすすめて楽しくすごしておられた。多田さんが所長に就任されてから年の暮に室長、課長以上の所員を招待して慰労して下さるのが恒例であったが、この費用一切所長の懐から出されたものであった。かように、多田さんは金銭には恬淡として、部下の面倒見は至ってよろしいので、奥様は大変だったろうと思います。一度、奥様から文句は出ませんかとお尋ね申し上げたら、私は金に縁のない男と思っていたが、入ってくる時はくるものだねといって笑っておられた。つまらぬことをお尋ねしたと恐縮した次第です。

私は一人で、時には同僚と多田さんのお宅を時折お訪ねすることがあったが、私には手土産は厳禁だと強く念を押されていた。したがって、手ぶらでお邪魔して、ウイスキーを頂いて、歓談して帰るのが常でした。同僚の一人が手土産持参してお訪ねしたところ絶対に受け取られないので弱ったと相談に来たことがある。お訪ねした折に、所長は手土産をお受取りにならない理由はとお尋ね申し上げたら私は今まで一度も受け取ったことがないので、そのことを今日まで通しているのだと申され、君はどうするかとの質問が返って来た。誠意の問題だと申し上げたところ、そうかという返事であった。かように、己を律することには実に厳しいものをもっておられたように思われます。

大先輩多田さんには、古武士的風格がうかがわれた。いまとなっては、再びその風格に接することができない。多田さんは大学の大先輩として、また電力中央研究所にあっては、かっての上司として私を御薫陶下されたことを有難く思っている。ここに、故人多田大先輩の思い出の一端を述べ、追悼の辞としたい。

訃音

明37	多田　耕象		46・10・9
明44	大森　　丙		46・3・25
大2	大島　　昊		46・8・
大7	乙葉　真一		46・10・23
昭7	松山　直樹		46・10・24
講大8	内田　五市		46・7・1
講大10	山本　伝蔵		
講昭5	安東　力三		

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

乙葉先輩の葬儀には鳥養会長の代理として東京支部長吉岡俊男氏が参列し、弔辞を読み、又洛友会一同名にて生花一対をお供えしました。

弔辞

京都大学洛友会を代表して一言、乙葉真一君のご霊前に弔辞を申し述べます。

貴君は、大正七年京都帝国大学電気工学科を卒業後、宮内省に奉職、終始東京に在住され、専門の業務に御活躍されると共に、同窓生の親睦と後輩の指導に献身されました。即ち、昭和初期、全国にさきがけて、東京に京大電気科卒業生からなる洛友会の創設を主唱され、以後会の円滑な活動に並々ならぬ熱情を注がれました。

戦後、全国を統合した洛友会が結成されるに当っても、貴君はその創設に尽力され、以後本部顧問東京支部長、東京支部顧問として会の発展に熱意を傾け続けられました。誠に貴君は洛友会の生みの親であり育ての恩人であります。

故 乙葉真一氏

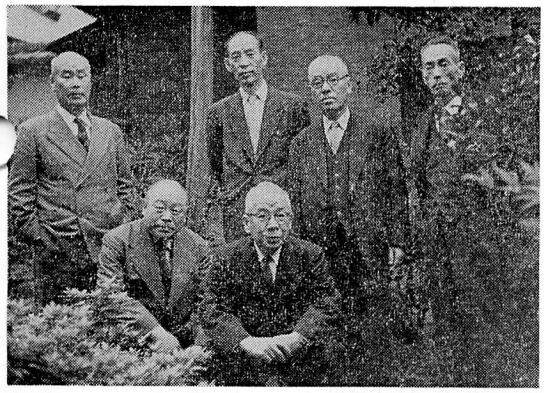
洛友会では貴君のこれらの功績に感謝し、本部会長より表彰状を授与されております。

今、俄かに会員一同が敬愛した貴君を亡い、誠に愛惜に堪えません。ここに貴君の会に注がれた温情を思いつつ、心から御冥福をお祈り申し上げます。

昭和四十六年十月二十五日

洛友会会長　鳥養利三郎

（洛友会東京支部長　吉岡俊男代読）



岡添　加藤　松田、阿部　乙葉　工藤

（間崎氏写す）

アア・乙葉真一君

日本電池㈱顧問　大正七年卒　間崎龍夫

乙葉君が亡くなった。思い出を書けと阿部君から頼まれた。表題を「盟友乙葉真一君の思い出」としてみたが、ピンと来ない。吾々仲間では「乙葉、おとは、おとわ」と呼び捨てするのが愛称であり、なじみ深い。世話方乙葉、クラス総代乙葉、としてみてもやはりいけない。故人の霊に、敬意を表して「君」をつけ「乙葉真一君」とする。

吾々仲間で乙葉君ほど人の世話をした者はない。私は乙葉君と、三高、京大電気と同期の卒業であるが、学校関係の会は総てと云っていい程君の世話になった。たとえば、電気の同窓会（洛友会）は、終戦後の復活に君の尽力が大いに貢献し、その副会長を務められた。三高の大正四年卒同窓会（四桜会）は東京の乙葉、京都の近藤泰夫の両君が万年幹事である。

洛友会員中の明治、大正卒業者の会合である「鶴友会」に至っては、長年にわたって、毎月十二日頃、鳥養先生の学士院御東上を期して、場所を変え、食事を変え、万事、君一人で世話をされた。毎回二十人を超す盛会で、中食のひと時を歓談有効に過し得て頗る好評、昭和初年卒業の連中の羨望の的となった程である。他人に真似の出来ぬお骨折と感ぜぬものは無い。

又吾々大正六年と七年組とで「信友会」を組織して居るが、これも君が中心の一人であった。その信友会を去る十一月八日、京大電気教室見学を目的として、大谷教授室に集まったが、君の入院中とは知らず、只出席は無理かなとは思いながら企画したのであったが、期せずして君の追悼会となった。集った者は六年の光野、松田保寿、辻忠夫、奥平、七年の阿部各務、宮崎、山西、間崎の十人。話しのすべては君の世話ずき、と云っては失礼だが、何でも献身的に、又個人の世話までよくせらた事で終始した。たとえば山西君が下宿こ困った時君の家に引き取って半年も世話になったとか、阿部君が胃腸が弱くて困った時代度々、乙葉君の家でお粥を作って貰ったとか話しは尽きなかった。

乙葉君は卒業後は、明治電機に席を置いたが後、笠井君の世話で宮内省内匠寮に入り電気課長、後に建築課長（?）として宮内省関係電気、機械、建築までの全部の主管をせられた様に聞いて居る。昭和の御大典の時衣冠束帯で奉仕された時の写真を貰った事がある。終戦後宮内省を退官され済美電機の専務をされ、晩年には管機工業の役員の他数ケ所の顧問を兼ねて居られた様に思う。最後に入院された日赤病院なども長年顧問を務められた所で白内症の時も今回最後の療養もこの日赤で充分の手当てを受けられたとの事で、この点まことに心安らかなものがあった事と思われる。

君は亦趣味の広い事でも有名で、運動はテニス、ゴルフ、玉突（ボートに乗った三高時代の写真もある）又特に謡曲は玄人の域に達して居られ、最後の病床で謡う気力が無くなって後は、かねて吹込んであったテープレコードを聞いて楽しまれた程である。

間崎も君と笠井君と三人で霞関のゴルフ場でその一日を楽しんだ事や、時々玉突をやった事が頭に浮ぶ。

君は資性温厚篤実などと云うのは月並み過ぎるが、その温顔と悠暢せまらざる態度は実に吾等の世話方として無類の適材であった事は吾等同輩の終世忘れ得ぬ所である。

君の写真は沢山あるが、茲に掲げたものが一番君の風丰を表して居る様に思ふ。加藤君が写って居るから大分前のものだが君の生前を偲ぶに足るものと思ふ。

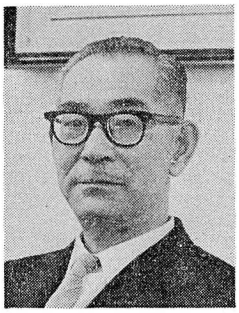
写真の写ってる加藤君も岡添君も既に亡し。吾等七年組卒業生二十七人の中、生存者十三名に対し浄土の彼岸に達した者今度の君を加へて十四名、過半数だ。加藤君、佐藤君、笠井君等が「乙葉、来たか」と歓迎し西方浄土では急に賑やかな同窓会が開かれる事であろう。

茲に遙かに御冥福を祈る次第である。（昭和四十六年十一月十二日記）

月刊 電気評論
12月号 毎月10日発売
特集 原子力発電
定価300円 送料28円
㈱電気評論社
京都市左京区田中大堰町48
TEL京都(075) 701-2582

富民貧人

日本建鉄㈱会長
大正十五年卒
石川辰雄



「無一物中無尽蔵」とは仏者の句であり、「人はパンのみにて生くるものにあらず」とは聖書の言だが、技術革新による豊かな社会の中にあって、この言葉をしみじみと味わい直すのが、これからの話である。

私ども大正十四年と十五年卒の洛友会員は、ふたクラス合同して十四日会という会をつくっている。この会はもう十年あまり前から、夫婦づれで毎年一回、二・三泊の大旅行をするならわしになっていて、六十余人の老いたる男女の大団体が、北は北陸から南は九州まで、なかなか豪勢なスケヂュールで押し歩いている。

今年（昭46）は、富山から立山にのぼって山頂で一泊し、第二日は黒部ダムにおりて、ホテル・クロヨンに泊った。このホテルの夕食のとき、私どものテーブルは一本松珠璣君（原子力発電会長）と平井寛一郎君（東北電力会長）と佐々木英四郎君（四国に大山林をもった材木屋の家督を相続している電気屋としては変り種）と私の四人であった。

微醺を帯びたくつろぎの中に、懐旧談や時局談がはずんだが、そのうち何かのきっかけから、一本松君の幼年時代の思い出話となった。

一本松君は広島県の瀬戸内海の島で育ったが、母方の祖父が蜜柑山をもっていた。蜜柑が色づく爽秋ともなれば、島の一部の人はこの蜜柑山に無断ではいってきて、おいしそうな蜜柑をもいでタラ腹たべたうえ、若干はふところに入れて持ってかえっていた。勿論無料なので、テイのよいドロちゃんであった。しかるに一本松君のおぢいさんは、この山荒しの人がはいってくると、姿をみせたら食べにくかろうと、こっそり姿をかくして、勝手にすきなだけ食べさせていたという。

こうした、人々の生活は貧しかったが、人の心は豊かであった時代の思い出話から、佐々木君がいうのには、徳島県には「スダチ」という香りの高い小さな橙のような実が、秋になると庭先に枝もタワワになる。そんな家では知らぬ通行人にも、さあさあほしければ取っていらっしゃいと、自由にわけ与えていた。それが近頃は都会から買いにきて、よい値で出荷されるようになったので、誰ももう人に与える者はいなくなった、と。豊かな世相の中に、人は心のゆとりを失って、貧しい心になってしまった。物の乏しかった頃には、「朝顔につるべとられて貰い水」という、温かくも豊かな人の心があったものをと忍ぶ、しみじみとした感懐であった。

「民富んで人貧しくなる」という新語は、いかがなものであろう。

桑名蛤

名城大学教授
昭和六年卒
古田久一

昭和二〇年名古屋の空襲に追われてこの桑名に疎開してからここに居ついてしまい、早くも二六年余の歳月が流れてしまった。恐らくはこの桑名でわが生を終ることになると思う。そこでふと桑名名産の一つを紹介しておきたい気持になった。桑名名産といえば皆様もご承知の民謡「桑名の殿様」の「時雨で茶々漬」からすぐさま思い浮べられるであろう時雨蛤ということになる。

桑名の浜の蛤は昔も今も海内随一である。木曽、長良、揖斐の三大河口に無尽蔵に産するが、この河口一帯は塩淡と潮流の具合、それに泥砂の品質が適良なことから貝の姿も、色沢も、また貝殻の外面の模様も美しく、殊に殻一杯に肥大した肉の淡白な味と、歯ざわりの良さは他に比べて抜群である。

歴史によると足利将軍家を初め徳川将軍家へは毎年献上品として贈られていたという史実が何よりの証拠といえよう。

この蛤を独特の醤油で煮立て生姜を和して時雨煮とするのであるが、時雨蛤という名称は歴史によると、桑名の俳人佐々部祐信が業者から命名の依頼をうけたのでその師美濃の俳匠各務支考（芭蕉の

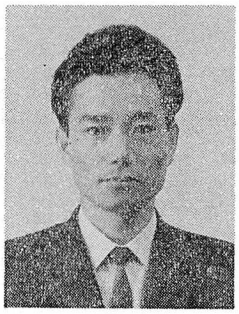
高弟）と相談した結果「時雨蛤」と命名したとある。「蛤の最も美しく最も味良きは冬、すなわち時雨の候なり、よって時雨蛤と名づける」という人もあるが、これは俗説のようだ。

ところで桑名蛤の真の風味は焼蛤でないと味わえないという。昔から蛤と松とは合性といわれ、松毬で焼くと中毒しないというところから、往時焼蛤といえば松毬を焼いて炙食したものだそうな。伊勢湾台風以前はまだ七里の渡しの古跡あたりを散歩すると、徳川時代の参宮名所図の挿絵に出てくる蛤茶屋の面影がなんとか偲べないでもなかったが、今はそのあたりも高い防潮堤が張りめぐされていて何の風情もない古跡となってしまった。

さて桑名は名古屋と四日市の二大工業都市のほぼ中間に位置しており、南北から海水汚染と大気汚染の産業公害がじりじり押し迫ってくる感じだが、「おっと、どっこい、その手は桑名の焼蛤」、木曽、長良、揖斐三大河の清流の威力によって蛤漁場はまだまだ健在であるし、大気汚染の方も伊吹おろしに吹き払われているかのようにスモッグなど見られようもない。わが桑名市がいつまでも桑名蛤とともに海内随一の健康都市で残ることを願っている。

ドイツ滞在記

京都大学助手
昭和三十八年卒　宇山親雄



ドイツの冬はおそくあけ早くくれる（冬至の頃で日の出八時二十七分、日の入四時十八分）。私は六九年十二月十一日に日本をたった。日本から北極まわりの航路は夕方七時半頃大阪空港をたってアンカレッジには朝の十時頃（当地時間）到着それから一きよに北極圏へ入っていく、冬の北極は夜しかない。私にとってははじめての飛行機の旅でありかつ言葉の不自由なドイツへ向うので緊張していたが百三十人乗りのジェット機には定員の⅓位しかのっていなかったので一列の席を占領して寝ることができた。ジュッセルドルフの空港到着は朝八時頃、空は雲が厚く空港はライトが煌々とついて夜明けはまだだいぶさきだという感じしかない。ドルトムントの研究所長（マックスプランク労働生理学研究所）からもらった手紙をたよりに、ジュッセルドルフの中央駅に行き、汽車でドルトムントへ向うころにはようやく空もしらみかけてきた。ドルトムント駅からは、タクシーで研究所へ。チップをすこしはずんだら、運転手から「おまえはドイツ語がうまい」とおせじが返ってきた。

ドルトムントは人口65万の西ドイツでは6番目に大きな市である。ルール工業地帯の東端に位置し、鉄道の中心点の一つであるので旅行をするには都合がよい。ルール工業地帯は鉄を中心にした種々の産業が密集しているため、煙突からの排気ガスは日本のそれと同様で空気が大へんよごれている。それでもドルトムントは幸いなことに（あるいは努力している精もあって）まだ比較的よごれていない方である。私が最初についた日、秘書からドルトムントの案内書をもらった。それには全市面積の½は緑地帯（公園・森・体育館他）であると記されてあってびっくりした。ドイツは日本の山がちな地形とちがって国土全体がゆるい起伏をなしているので人の住める面積もずい分大きい（面積も人口も日本のほぼ⅔）。そして家をたてるにも一定の秩序があって、急速な都会人口の増加の結果2DKのアパートがてんでばらばらに立っているという景色はみられない。とにかく全く1人でドイツ人の生活の中にとびこんだのだから予備知識もなにもあったものではない。まずは地理からおぼえようと勤務時間がおわったら夜の街へふらふらと歩きにでかけていった。その冬はとくに寒い冬であったらしくマイナス20℃の日がいつもより多かったのであろう。道を歩いている人は、ほとんどみかけず、犬の散歩のために出かける人にしかあわない位だった。

私の語学力は、生きていく上に必要な最少のことしか言えない程度だったので、語学力を向上させることにも努力しなければならなかった。最初はやさしい新聞をよんだり、広告の看板を片ぱしから辞書でしらべたり、あるいはラジオのニュースをきいたり（しかしラジオのニュースはとうとう、私のドイツ滞在中には完全に理解するまでには至らなかった）新聞をよむにしても、マンガが単語の数がすくなくて一番手がつけやすかった。新聞は地方紙が発達していて、全国紙の大きなのはないようだった Frankfurter Allgemeine, Süddeutsche Zeitung, die Zeis その他、いわゆる外国記事や解説記事に力をいれる新聞が全国紙とみられなくはないけれども販売数はとても日本の全国紙には及ぶべくもないと思う。さて語学の話に戻って一年九カ月の滞在中できるだけドイツ人の会話を理解しようと昼食時は必ずみんなと食事をするようにし、コーヒーは一緒にのみというようなことをしていたが、大した進歩は得られなかった。それで感じたことは体系的な語学教育はやはり非常に重要なことだということである。

ドイツでの生活にようやくなれた頃、研究所仲間の一人とduでよびあえるようになった。彼の名はボルト(Boldt)といい、私と同年輩の研究助手で結婚していて研究所のすぐ近くにすんでいる。彼にはほとんど毎火曜日の夕食にまねかれたので彼との交際を通じてドイツ人の生活様式をずい分多く知ることができたと思う。彼の収入は国家公務員に準じていてほぼ手取で16万円、実際の価値は12・13万円位に相当する。彼らは生活をたのしむ方法をよく知っている。例えば私が参加したのにつぎのような例があった。ボルト氏の奥さんの弟さんがフライブルグ(Freiburg)大学の学生で大学卒業の国家試験に合格したのを機会に知りあいを十数名集めて黒森(Schwarz Wald)の中の田舎家で

一晩すごすことになった。それは二月の中旬だったと思う。ドルトムントからフライブルク（黒森のすぐそばの街）までは約五百km、ドルトムントからは四人がベンツで夕方の六時半頃出発、高速道路（Autobahn）を百数十 km/h でフライブルクに向けて突っぱしった。途中フランクフルトで仲間をひろい、フライブルクについたのは午前零時をまわっていた。しばらくぶりに会った仲間達はワインを飲みながらとうとう夜明かしし、翌日はワインの産地で有名なカイザーストゥールへワインを仕入れにでかけた。製造元で味見をしつつ、我々が買ったワインはビンの数にして二百本にもなった。そして午後は黒森の田舎家めざして車で近くまでいき、そこからはそりで（雪がまだつもったままなので）その目ざす家まで十数人でおしたり引いたりして食料品や寝袋・トランクをはこびあげた。家は大家族時代のもので部屋数は多く今は市の管理になっていて、丁度山の家といった感じである。料理・掃除一切をかりたものの責任で行うので大へん安くたのしめる。その仲間にはフランスのマドモアゼル（masmoiselle）も参加していた。夕方から夜にかけてもってきたソーセージを煮て夕食にし食後は碁をしたり、カード遊びをしたりして夜半まですごし、翌日は山の中を散歩したりして、午後下山し夕方おそくにはドルトムントへ帰りついた。

ドイツの労働習慣はいま週五日制で普通土・日と休みになる。だから前述のような旅行は容易にすることができる。とくにドイツは中央ヨーロッパに位置し高速自動車道路が発達しているのでどこへでかけるのもあまり苦にならない。また小国がたくさん国境と接しているため、国境を通過するのも簡単である。私はアジアから来ていることが一目みればわかるので、国境通過の時は自動車であれ列車の中であれパスポートの検査はされたが一般のヨーロッパ人はそれさえされずに、通りすぎていくことがあたりまえのようである。これは一つには無数にある国境を通過する道路や列車で厳重な検査は実際的には困難なためと、二つにはヨーロッパは歴史上たびたび国境がかきかえられ外国という概念が日本とはずい分ちがってほんの隣人という気持などにしか感じていないためでもあろう。

私はドイツ到着後の二カ月をのぞき家具付の二部屋をドルトムントの郊外にかりてすんでいた。ここは研究所からバスで十五分の住宅地で、私のかりた当初は老夫婦がすんでいるだけの大きな家の二階の二間であった。奥さんはオランダ人、だんなさんはドイツ人で織機の部分品のあきないをしている事業主であった。この家族はすでに七人全部の息子娘さん達を独立させて、あいた部屋を私にかしてくれたのである。ドイツ人の平均の住いの広さは、夫婦二人と子供二人位までだと80平方米ほどの広さが必要であると考えられている。日本の住習慣とは異なるので比較は容易ではないがやはりゆったりした感じがする（日本住宅公団の3DKの平均的面積は60平方米）。寝室・居間・台所・浴室兼便所が基本的な住いの空間だが家族構成員の多さに応じて寝室の数が異なり居間の大きさも異なる。そして一般に家具の上等なのをそろえるのが彼らの生活していく上での一つの目的になっている。日本での我々のすまいでは寝室だけにしかつかわない部屋というのは現在の住宅事情では無理だけれども、彼らの生活習慣ではそういう考え方はなじまないらしい。

ドイツの祝祭日のほとんどは宗教と関係している。その内の大きな祝祭日は復活祭（三月末から四月初め頃）とクリスマスである。とくに復活祭は長い冬がおわって春がくる頃なのでドイツ人は休日を利用してぼちぼち旅に出はじめる。有給休暇は年令により差があるが、二十数日ある。これらの有給休暇は夏期と冬期に長期間とられるために復活祭の時には祭日だけを利用してでかけていく。そのため高速道路は大へんこむので、若い連中は早朝の車のすくない内に出発するなどしてその難からのがれることに苦心する、旅費も多くは倹約している。自動車に寝袋とテントをつんでホテル代を節約するのから、マイクロバスに簡単な炊事具寝袋テント一切をつんで食事住居交通手段すべてをできるだけ安くあげようという工夫をよくしている。夏の休暇はふつうの人は三週間から四週間とって家族ででかけていく。これは現在における民族大移動である、今年の夏はドイツの新聞によれば全国民の⅔が休暇旅行にでかけたと報じていた。主な目的地は北海・バルト海・オランダ海岸・オーストリーの山地・スペイン、そして遠くはギリシヤ・イスラエル・北アフリカにまで足をのばしていく。だからこの時期に例えばオーストリーを旅行したらドイツ人にばかり出会うことが普通になる。しかし夏期のヨーロッパ的規模とみうけとれる大旅行も中身をみるとドイツ人・フランス人は観光・静養が目的であるのに反し、イタリア・スペイン・ユーゴスラビア・ギリシヤの人たちは外国人労働者としてドイツへ働きにきているので、ドイツ人の休暇旅行とは質がずい分違う。

ドイツ人の日本人に対する感情はよい方である。一つには歴史的な理由もある。すなわち第二次大戦の時共に枢軸国だったという点に共感をよせていることである。極端な人からは、日本は最後までがんばって戦ったとほめられて、私がとまどってしまったこともある。しかし日本についてはトランジスタラジオ・カメラ・時計・オートバイが優秀であるという知識以上には出ない。それは逆に私達がドイツについてどれだけ知っているかを問いなおせば同様のことが言えると思う。それでも新聞や雑誌には日本の経済についての解説記事が出るしテレビには日本の劇映画も上映されたのを見たことがある。ときにはびっくりするような記事にも出あう。例えば天皇の訪欧の計画が発表された記事では、二千六百三十一年の日本の歴史上はじめての天皇の海外旅行といった調子で報じられていた。日本では戦後消えさった戦前の歴史がどこから紹介されたのかと首をかしげていたら、下宿の女主人から不思議だったら新聞社に手紙をかけと忠告された。しかしそれはとうとうはたさずだった。地方

新聞が地域住民に非常に近いものだということは特徴的なことである。交際相手を求める頁（つまり結婚相手を求める欄）、中古車の売買、その他電気製品・自転車の売買といったものがきまった日に新聞に出る。この欄は商売人が利用するより、個人が利用するのが多い。空屋、空部屋さがしもこれでやれる。

ドイツ国民の性についての考え方は保守的だといわれている。たしかに年配の人達はその通りだろうが、若い人達の間ではもはやその古さは通用しないようである。私のドルトムント滞在中に一週間程だったが研究所の前のホールで性展があった。私も入場料（五百円）を払って見てきた。入場者は恋人同志や夫婦づれが多く、日本でなら闇から闇へと流れていく製品が堂々と店に展示され、若い女性が大声をだして呼びこみをしていたのにはびっくりした。

映画・レコード・写真・性具とにかくあらゆるものが集められていた展覧会だった、私は日本人とヨーロッパ人の間には性に対する考え方が質的にずいぶんちがうと感じたが、そういう日本人の分析にはまだであっていない。

最後に研究体制について書いておかねばならない。大ざっぱに言ってマックスプランク研究所では研究さえしておればよいと言える。つまり研究を支える補助者が十分居て彼らがあらゆる面にわたって研究の補助をしてくれる。たとえば実験をやる研究者には二・三人の実験助手がついて実験準備から実験後のあとかたずけまで全部してくれるので、研究者は重要なところだけ手を下せばよい。さらにデータ解析のためにはプログラマーがおり、実験結果を図に表わすための図面をかく人が居る。タイピストはもちろんのことである。彼女達はあらかじめテープに録音しておけばデイクテイションで手紙もタイプしてくれる。新しい測定方法が開発したくなれば電気技術者のチームがあり相談にものってくれるし実際に製作をしてくれる。あるいは機械工は、特注の部品もつくってくれる。すなわち研究者は研究さえしておればよいのである。とかいてくればよい所だけのようだけれども、研究所はあくまで研究所だから、学生に対する教育の仕事がない点が、大学と根本的に異なるし、さらにマックス・プランク研究所は、一つのテーマのもとに所長によって統轄されていて、日本の大学と同じく助手の独立した権利は非常に少ない（予算決定権、人事権は所長がにぎっているようである）。マックス・プランク研究所は研究テーマ別に独立して各地にちらばっていて約50の研究所がある。近年研究体制とくに助手の地位の高上を要求する声が大きくなって全マックスプランク研究所の研究員の代表者会議がひんぱんに開かれ、地位向上、テーマを現実の生活に合ったものにする運動（たとえば公害問題へのとりくみ）がさかんになりつつある。研究所の規模は、研究者約20人に対して行政事務、技術者技能者その他研究補助者が百人ほどいる。研究を円滑にやっていくにはこの程度の規模は、丁度よいのではないかとの印象をえた。

私がドイツをたった9月3日はもう京都でなら十月中旬の寒さの気候になって数日たった日であった。ドルトムントの空は秋になると曇天の日が続く。仲間が自動車で私達の家族をジュッセルドルフの空港までおくってくれた。さいわいなことに飛行機は⅓から半分しか占められていなかったので子供づれの私達には気が楽だった。日本への北極まわりの旅はくる時に反して、飛行中ずっと太陽をみながらとんだ。大阪空港へついた時まず感じたことは夢の世界（ドイツ）から別の夢の世界（日本）へついたように思ったことだった。そしてすみきった秋ぞらをみるようになってようやく夢の世界は消えていき、日本でのいそがしい毎日の現実がよみがえってきた。

洛東会の昼食会

洛東会とは御存じない方が多いでせうが、昭和二年乃至七年卒業で東京都内に勤務する者の集まりです。会員は現在六十二名位で、従来年に二・三回夜集まっていました。段々先も短くなるのでもっと頻繁に顔を合わせようと云うことになり、本年一月より毎月一回昼食会を下記の如く催しています。

日時　毎月十六日正午
　　但十六日が土曜或は休日の時は休日明けの日
場所　中央区京橋二丁目二番地
　　京橋ビル地階「宝来」
電話（二八一）―三九八二

東京駅南口を八重州の方に出ると道をはさんで興銀の白いビルが見えます。その左側に沿って二百米位進むと福井銀行と云う大看板のかかった建物が見えますが、それが京橋ビルです。

出席者は毎回十二乃至二十名です。出席率は昭和二年組が最もよく、大島文平先輩は皆出席です。月に一回元気な顔を見せて、軽食を頂きながら和気あいあいと話合うのも楽しみなものです。時々地方より出張した方が珍らしい顔を見せることがありますが、是非お立寄り下さい。（昭六福間正記）

編集後記

○本号は、洛友会の大先輩で顧問であられる多田耕象、乙葉真一両氏の追悼号となりました。有力な先輩を失うことは、誠に淋しい限りです。明治四十四年御卒業の大森丙氏も三月二十五日に御逝去になったことを、後から知りました。同氏も大先輩として、洛友会の会合には、何時も御出席になり、昭和四十二年には、「人生函数の根は一つ」と題し、会報に御投稿頂きました。ここに、此等大先輩諸氏の御冥福を御祈り申し上げます。

○本号は大勢の方々より、御投稿を頂きました為、紙面が超過し三砂延治、中沢力両氏の原稿を次号に延期の已む無きに至りました。両氏に御詫び申し上げる次第です。

○目下、洛友会名簿を印刷中にて十二月初めには、会員各位の御手許に御送り出来る見込です。今後、洛友会の事務に関しては直接事務局応用科学研究所内洛友会宛に御連絡下さいます様御願いします。（京都大学電気教室宛にしますと、廻送のため、若干遅れますので御承知願います。）

（幹事山本記）

住所　京都市左京区田中大堰町
（財）応用科学研究所内
洛友会事務局　電七八一―三五四六